



## クロアチアのセルビア人問題の深層（現代社会論）

材木, 和雄

---

**(Citation)**

社会学雑誌, 14:233-245

**(Issue Date)**

1996-10-01

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81010891>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010891>



# クロアチアのセルビア人問題の深層

材木 和雄

広島大学総合科学部助教授

## 一 はじめに

ユーゴ紛争は、一九九一年六月二七日、ユーゴ人民軍がスロベニア共和国の要衝を攻撃することにより、その戦端が開かれた。しかし、この戦闘は一〇日間で終結し、本格的な戦争には発展しなかった。その後の戦禍の規模からみると、ユーゴ紛争はむしろクロアチア共和国から始まったといつてよいだろう。その直接の発端はセルビア人の武装蜂起にある。

しかし、クロアチアのセルビア人はなぜ武装蜂起に走ったのだろうか。これは一九八〇年代後半のユーゴの体制変動と切り離しては理解できない。

ごく簡単にこの間の経過を述べると、一九八七年にセルビア共産主義者同盟の指導者となったミロシエビッチは、中央集権化の方向でユーゴ連邦を再編しようとしていた。彼は、セルビア民族主義者を使ってセルビア人を動員し、

デモや集会などの示威行動で彼の方針に反対する党幹部を辞任に追い込み、親ミロシエビッチ派と交代させるという手法により、セルビアとモンテネグロの両共和国を支配下においた。次なる目標はクロアチアにおかれた。一九八九年にはクロアチアでもセルビア人の大規模な集会が開かれるようになった。ミロシエビッチの狙いは、クロアチアの共産主義者同盟の幹部に親ミロシエビッチ派を据えることであつた。

ところが一九九〇年にユーゴ共産主義者同盟が崩壊し、各共和国で複数政党制による自由選挙が実施された。クロアチアでは、トウジュマンが率いるクロアチア民主同盟が圧勝し、共産主義者同盟は政権を失つた。クロアチアはスロベニアとともに、ユーゴの連邦制を「国家連合」の形で再編することを提案し、連邦制の維持を求めるセルビアと鋭く対立するに至つた。一方自由選挙の後、クロアチアのセルビア人は反政府活動をエスカレートさせた。セルビア人が多数居住する一部地域では、警察署から武器が強奪さ

れ、幹線道路は封鎖された。セルビア民族主義の政治団体であるセルビア民主党は、これらの地域でセルビア人の自治を求める住民投票を強行した。やがて彼らはセルビア人自治地区の成立を宣言し、クロアチアからの分離とセルビアへの編入を要求した。

セルビア人が自治を宣言した地域には、二つのタイプの行政地区があった。一つは、セルビア人が人口の上で圧倒的多数を占める地区であり、もう一つはセルビア人が相対的に多数の地区もしくは多数に達しない地区である。つまりクロアチア人もかなりの比率をしめるか、むしろ多数をしめる地域であった。セルビア人武装勢力は、前者の地域は比較的容易に実力占拠することができたが、後者の地域はそうはいかなかった。

クロアチアがスロベニアとともに独立を宣言した後、セルビア人過激派はこれらの地域を武力制圧しようとした。クロアチア共和国はこれを阻止しようとしたが、ユーゴ人民軍がセルビア人の保護を理由に介入し、セルビア人武装勢力を事実上支援した。戦闘は本格化した。が、装備で劣るクロアチア共和国軍は各地で敗退し、セルビア人の占領地域が拡大していくことになった。

一九九一年になってミロシエビッチは、セルビア人は一つの国家に居住しなければならぬと述べ、クロアチアが連邦から離脱した場合には、共和国間の国境線変更を要求

することを表明していた。クロアチアのセルビア人武装蜂起は、このセルビアのユーゴ再編構想を実現するために引き起こされたものである。実働部隊を組織したのは、ミロシエビッチと手を結んだ民族主義者であり、ユーゴ人民軍関係者と一部地域のセルビア人指導層がこれを支援した。反政府活動や戦闘に参加したセルビア人の多くは、民族主義的な扇動や操作によって、動員された人びとである。これにはセルビアのマスメディアの宣伝活動もセルビア人の扇動に大きな役割を果たした。とくにクライナ地方は教育水準が低い農民が多く、これらの人びとは民族主義的な宣伝によってナイーブに操縦されやすかったといえる。

だがそれでもなお次のような疑問を私は発せざるを得ない。クロアチアのセルビア人、とくに一部地域のセルビア人支配層はなぜミロシエビッチとセルビアの路線に身を委ね、クロアチア政府に対して反旗を翻したのか。クロアチアはセルビアはよりも経済的に発展した地域であり、ユーゴから独立することによってさらに発展することが予想された。だからクロアチアの発展に期待してクロアチア政府の路線を支持するという選択肢もセルビア人にはあったはずである。実際に武装蜂起したセルビア人はクロアチアの一部地域の住民であって、クロアチアのセルビア人の大半はこれに加わらなかったことを見逃してはならないだろう。しかしセルビア人の支配層がセルビアの路線を支持し、武

装蜂起に加担したこともまた事実である。この疑問を解くためには、やはりクロアチアにおけるセルビア人問題の深層には一体何があるのかを探り当てなければならぬ。<sup>(2)</sup>

## 二 旧ユーゴの民族構成

はじめに旧ユーゴスラビアの人口学的な特徴を述べよう。ユーゴは一九八一年の総人口が約二二三万人であり、六つの主要民族と二〇を超える少数民族民族によって構成される典型的な多民族国家であった。六つの主要民族とその割合は、セルビア人(三六・三%)、クロアチア人(一九・八%)、ムスリム人(八・九%)、スロベニア人(七・八%)、マケドニア人(六・〇%)、モンテネグロ人(二・六%)であり、その他にユーゴスラビア人を表明する者が五・四%いた。これらの主要民族はムスリム人を除いて民族名を冠する共和国をもっていた。しかし、いずれの共和国も単一の民族から成るわけではなく、その他の民族を抱え込んでいた。またいずれの諸民族も複数の共和国に跨って居住していた。

ユーゴが多民族国家であることは有名である。しかし別の側面からみると、あまり知られていない特徴があることが明らかになる。まず第一に、言語的にみると、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人、モンテネグロ人はセルビ

ア＝クロアチア語という同一の言語を話す人びとである。ユーゴスラビア人もまたセルビア＝クロアチア語を話す人口とみてよいだろうから、セルビア＝クロアチア語の言語人口はユーゴの総人口の七三・〇%に達することになる。またスロベニア語とマケドニア語もセルビア＝クロアチア語に近い南スラブ語に属する言語である。ユーゴは総人口の八五%を南スラブ人がしめる。ユーゴは、セルビア＝クロアチア語人口あるいは南スラブ語の人口の割合が圧倒的に高いという点で、大きな同質性をもつ国である。

第二に、各共和国とその民族構成をみると、北部の共和国は民族的同質性が高く、南部の共和国は民族的同質性が比較的低いという特徴がある。すなわち、スロベニアはスロベニア人が九一%をしめ、クロアチアはクロアチア人が七五%をしめる。これに対してセルビアはセルビア人が六六%、モンテネグロはモンテネグロ人が六九%、マケドニアはマケドニア人が六七%となっている。ボスニア・ヘルツェゴビニアは、ムスリム人四〇%、セルビア人三二%、クロアチア人一八%、ユーゴスラビア人八%となっており、もっとも民族的同質性が低い(ただしセルビア＝クロアチア語の言語人口という点でもっとも同質性が高い)。

第三に、民族の居住地域という点でいうと、スロベニア人はその九八%がスロベニアに住んでいる。クロアチア人は、クロアチアに七八%、ボスニア・ヘルツェゴビナに一

七%、セルビアに三・四%居住し、セルビア人はセルビアに七六%、ボスニア・ヘルツェゴビナに一六%、クロアチアに七%が居住する。モンテネグロ人は、モンテネグロに七〇%、セルビアに二五%居住し、マケドニア人は、マケドニアに九五%が居住する。民族問題の背景として、民族の居住地域と国境とが一致しないことがよく指摘される。ユーゴにはその典型的な例といえるが、このうち数の上で共和国の外部に居住する人口がもつとも多い民族はセルビア人である。ユーゴの中でセルビア人は最大多数の八四万人を数えるが、このうち約二四%の一九五万人がセルビア共和国の外に居住していた。

ユーゴ紛争では、このセルビア共和国の外部に住むセルビア人、具体的にはクロアチアのセルビア人の一部が、ついでボスニア・ヘルツェゴビナのセルビア人の一部が武装蜂起したのであった。

### 三 クロアチアの地理および人口構成

クロアチアは、旧ユーゴでは、北部に位置する共和国の一つであった。国土面積は、五六、五三八 $\text{km}^2$ であり、ユーゴの国土の二一%をしめていた。日本でいえば、北海道（七八、〇七三 $\text{km}^2$ ）より小さく、九州（三六、五五四 $\text{km}^2$ ）と四国（一八、二五六 $\text{km}^2$ ）を足したくらいの大きさである。

一九九一年の人口は四七六万人。これは福岡県の人口にほぼ等しい。このうち約六〇%は都市人口であり、また約二〇%は首都ザグレブに集中している。

地理的には、クロアチアは、ザグレブを中心とする内陸部地方、アドリア海に面したダルマチア地方、ダルマチア北部の山岳地方、ハンガリー平原に続くパンノニア平原に位置するスラボニア地方に分かれる。ダルマチアには温暖な地中海性気候の海岸線と無数の島嶼があり、ヨーロッパの観光と保養のメッカであった。スラボニアには豊かな農業地帯が広がる。またスラボニアには年間三〇〇万トンの原油を産出し、旧ユーゴの需要の四分の一を満たしていた油田もある。

クロアチアは、スロベニアとならんで、旧ユーゴの最先進共和国であった。一九八一年には旧ユーゴの工業生産の四分の一をしめ、石油工業・造船業・化学工業がとくに発達していた。工業製品の輸出とアドリア海沿岸の観光業という二つのドル箱をもち、クロアチアは旧ユーゴの外貨収入の八〇%を稼ぎ出していた。

一九九一年に行われた人口調査の結果を加えて、一九七一年から一九九一年までのクロアチアの人口と民族構成の変化をみると、まず一九七一年にはクロアチアの人口は四四三万人、うちクロアチア人は三五一万人（七九・四%）、セルビア人は六三万人（一四・六%）、一九八一年には人

口四六〇万人、うちクロアチア人三四五万人（七五・〇％）、セルビア人五三万人（一一・六％）、一九九一年には人口四七八万人、うちクロアチア人三七四万人（七八・一％）、セルビア人五八万人（一二・一％）となっている。一九八一年にクロアチア人とセルビア人はともに絶対的にも相対的にも減少したが、これはユーゴスラビア人を表明する者が増加したためである。一九九一年にはユーゴスラビア人を表明する者は減少し、その結果クロアチア人とセルビア人は共に増加している。

以上のことから、クロアチアは実質的には、八〇％近いクロアチア人と一五％近いセルビア人から構成されているということが出来るだろう。一九九一年の時点では、クロアチアには六〇万人を超えるセルビア人が居住していたと推測される。セルビア人はクロアチアの各地に居住し、とくに都市部では、セルビア人はクロアチア人とまったく混住状態にある。それでもクロアチアにはセルビア人が伝統的に多数居住する地区がある。行政地区でいうと、クロアチアにはオプチナと呼ばれる行政単位が一一五あるが、このうちセルビア人が人口の過半数をしめるオプチナが一一、相対的多数をしめるオプチナが二あった。これらのオプチナには約一七万人のセルビア人が居住し、それはクロアチアのセルビア人の三〇％をしめていた。これらのオプチナはダルマチア北部の山岳地帯に集中し、「クライナ」地方

と呼ばれている。ユーゴ紛争の発端となったセルビア人の武装蜂起はこの地域で始まったのである。彼らの蜂起の原因を探るためには、まずこのクライナ地方の歴史を遡る必要がある。

#### 四 クロアチアのセルビア人の起源

クロアチアにおいて、クロアチア人とセルビア人は最初から混住状態にあったのではない。このことは旧ユーゴの他の地域についてもそうである。

クロアチア人とセルビア人はバルカン半島の原住民ではない。言語的にはクロアチア人とセルビア人はスラブ語族に属する。定説によれば、スラブ人はその現住地から各地に移動したが、このうちクロアチア人とセルビア人は、スロベニア人とともに、カルパチア山脈の北方から南方に移動したスラブ人である。彼らは六世紀末からバルカン半島に到来、七世紀半ばには定住を完了した。しかし近年、クロアチア人とセルビア人は純粹のスラブ人ではなかったという説が現れている。彼らの祖先は中央アジアのカフカズに住んでいたイラン系の遊牧民サルマチア人であったらしい。サルマチア人の一部はファン族の移動と共に西方に移動し、スラブ人を征服した。しかし彼らは多数のスラブ人の中でスラブ化してしまい、そののちスラブ人としてバルカ

ン半島に移動したといふのである。

いずれにせよ重要なことは、クロアチア人とセルビア人はそれぞれ地域的に住み分けをおこない、中世期に至るまでそれぞれ別個の文化と歴史を發展させてきたことである。

クロアチア人は、七世紀には北部のグループがトルコ系遊牧民のアバルル人の支配下にあり、南部のダルマチアのグループがビサンチン帝国の支配を受けていた。アバルル人の国家は八世紀末にフランク王国によって滅ぼされた。九世紀には、クロアチア人の居住地域には、フランク帝国とビサンチン帝国の影響が交錯するようになった。

九二四年、クロアチア人の一族長トミスラブがクロアチア王を宣言し、クロアチア人を最初の独立国家に統合した。この中世クロアチア王国は国王ペータル・クレシミル（一〇五八―七四年）の時代に最盛期を迎えた。その領土は、今日のクロアチアに加えて、ボスニアの大半に及んでいた。後のクロアチア人がクロアチアの黄金時代と回想するのはこの時代である。一〇七五年、クレシミルの子ズボニミルは、「クロアチアとダルマチアの王」としてローマ教皇から戴冠を受けた。ここで重要なことは、フランク王国による支配以来、クロアチア人は西方教会との関係を深め、西欧のカトリック文化圏に組み込まれていったことである。ズボニミルの死後、王位継承をめぐる、クロアチア王国は混乱した。クロアチアの貴族の一部は、ズボニミルの

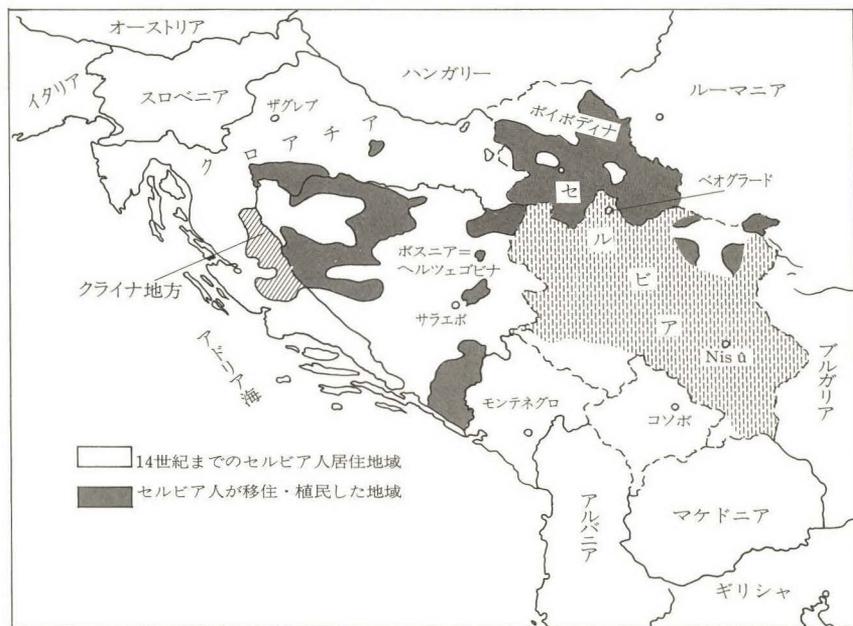
妻の兄弟であつたハンガリー王ラーズロ一世に王位に就くことを要請した。一〇九一年に彼はこれを受け入れ、一〇九四年にはザグレブに司教座を創設した。ザグレブは後にクロアチアの教会の中心地となつた。ラーズロの死後、その後継者のカールマンは反対派のクロアチア貴族の反乱を鎮圧してクロアチアを制圧し、一一〇二年に「クロアチアとダルマチア王」の地位に就いた。クロアチアの貴族とカールマンとの間には国家の結合をめぐる協定が結ばれ、こうしてハンガリーとクロアチアの結びつきが始まり、それは第一次世界大戦の末まで八〇〇年間も続くことになつた。

このハンガリーとクロアチアとの結合の性格をどうみるかは議論が分かれている。ハンガリーの歴史家はこれはハンガリーによるクロアチアの併合にはかならないと主張している。これに対して、クロアチアの歴史家は、クロアチアは国家主権を維持してきたと主張している。そのときどきの力関係によって、クロアチアが独立国家のように行動するときもあれば、ハンガリーがクロアチアを属国として扱うこともあつた<sup>3)</sup>。

しかし重要な事実はハンガリーがクロアチアを直接統治に置かなかつたということである。カールマンは、クロアチアの行政機構を整備して、パンと呼ばれる総督をおき、クロアチアの王族や貴族を就任させた。またサポールとい

う貴族の議会も残した。すなわちハンガリーは、内政上の問題をクロアチア人の自治に委ねてきたこと、またクロアチア人はこれを貴族の合議制によって処理してきた。このことがなぜ重要かといえば、こうした伝統により、クロアチアの政治家は第一次世界大戦中に分権的な連邦制を前提にして統一国家を構想し、セルビアを中心とする中央集権的な統一国家を構想するセルビアの政治家と根本的に対立することになったからである。その後ハンガリーはトルコに征服されたため、一五二七年クロアチア議会はオーストリア王フェルナンドを国王に選んだ。以降クロアチアはハプスブルク帝国に属することになった。

次にセルビア人は、バルカン半島の中央部に定住地をもっていた。彼らの居住地域は、ブルガリア帝国とビサンチン帝国の影響が交錯する地であった。九世紀の半ばにビサンチン皇帝の宗主権のもとでセルビア人は現在のセルビア南部のラシユカに最初の国家建設をおこなった。このころからセルビア人は東方教会の影響下に入った。一六九九年ステファン・ネマーニヤがラシユカの族長になった。彼はビサンチン帝国の王位継承争いに乗じて領土を拡大し、ゼータ（現在のモンテネグロ）と南ダルマチアの一部を征服して中世セルビア帝国の基礎を築いた。このネマニッチ王朝はその後二〇〇年間続いた。ネマニッチ王朝には一三三一年にステファン・ドゥシヤンが現れた。彼は南東に占領



地域を拡大し、またハンガリーからベオグラードを奪取して、中世セルビアは、マケドニアとアルバニアの全土、およびギリシャとブリガリアの一部を加え、バルカン半島の三分の二を支配する大帝國になった。ドウシヤンは「セルビア人・ギリシヤ人・ブルガリア人・アルバニア人の王」の称号を名乗った。

一三三五年のドウシヤンの死後、諸公の反乱によりセルビア帝國は分裂し、その勢いは急速に衰えた。このころ強大になりつつあったオスマン・トルコはバルカン半島に進撃を開始し、一三七一年マリツアの戦いでセルビアの諸公連合軍を破った。その後セルビアのラザール・フレベリヤノビッチ公は、ボスニア王トウブルトコの援助のもとにキリスト教徒の連合軍を結成し、一三八九年にコソボ・ポリーエでトルコと一大決戦を挑んだ。この連合軍にはアルバニア人、クロアチア人、ブルガリア人、ハンガリー人も参加した。しかしキリスト教徒軍は大敗北を喫した。一四五九年トルコはスメデレボにあったセルビア最後の要塞を陥落させ、セルビアの全土を制圧した。この後、トルコは約三五〇年間セルビアを支配下に置くことになる。その後トルコは一四六三年にボスニアを陥落させ、一四八三年にはヘルツェゴビナを占領し、一五二六年にはハンガリーをモハチの戦いで破り、ハンガリーの南部と中部を支配した。一五二九年にはトルコはオーストリアに侵入し、有名なウ

ーン包囲をおこなっている。現在のクロアチアの領土では、スラボニアとダルマチア東南部がこのころにトルコによって占領されている。

トルコのバルカン半島侵攻はバルカン半島に大規模な人口移動を引き起こし、民族の分布図を変えていくことになった。もっとも大きな影響を被ったのはセルビア人である。まずコソボの戦いの後、一四世紀末から一五世紀に、トルコの脅威の前に、サバ川とドナウ川を越え、セルビア北方ハンガリーのボイボディナに逃亡するセルビア人が続出した。一四五九年のセルビア陥落後にはとくに大量のセルビア人の移住が起こった。当時のハンガリーもトルコの侵攻の脅威にさらされており、セルビア人の移住は好都合に映った。セルビア人はトルコの侵攻に対する盾として使えただからである。すなわち、ハンガリーはトルコとの国境に要塞を築き、セルビア人を国境警備兵に雇った。

トルコの侵攻はその他の地域の人々にも影響を与えた。とくに一四六三年にトルコはボスニアを占領し、カトリック教徒のイスラム教への改宗が始められた。ボスニア・ヘルツェゴビナのクロアチア人の中には、クロアチアやダルマチアに逃亡する者が増えた。セルビアを支配下に置いたトルコはセルビア人を徴兵し、オーストリアやハンガリーとの戦争に彼らを従軍させた。トルコはこのセルビア人を占領地の国境警備兵に仕立て、クロアチア人が逃亡した土

地に移住させた。したがって、トルコのバルカン半島中西部への侵攻に伴って、セルビア人の居住地域がセルビアの西方および北方、すなわちクロアチアとハンガリーの中に広がっていった。

他方オーストリアはトルコの侵攻に対抗するため、南部国境の防御を固めようとした。一五七八年、オーストリアはトルコとの国境に沿って「軍政国境地帯」と呼ばれる特殊な地域を設置し、直接管理に置いた。この地の住民は、軍務に服することにより土地の保有を認められていた。これらの地域はトルコの侵略により人口が激減していたので、防衛問題の解決と共に、再植民を実施しようとしたのであった。そしてこの土地に新たに住み付いた住民の大半はセルビアから避難してきたセルビア人であった。クロアチアのセルビア人が最初に武装蜂起した地域であるクライナ地方はこの軍政国境地帯に属していた。

新たに軍政国境地帯に入植したセルビア人の中には、トルコの国境部隊から脱走したセルビア人も多かった。トルコとの対抗関係上オーストリアはこれを歓迎した。一七世紀にも主としてスラボニアを中心にセルビア人の移住は続いた。たとえばオーストリアは一六九〇年にトルコを破り、トルコはハンガリーとスラボニアをオーストリアに返還したが、このあとセルビアの総主教アルセニア三世は、ポイボディナとスラボニアに向けてセルビア人の大規模な移住

を組織した。彼らはトルコと戦うことにより、オーストリアから種々の特権を約束された。いずれにしても、このような移民により、クロアチアの中にセルビア人が居住する飛び地やクロアチア人とセルビア人の混住地域が形成されることになったのである。

## 五 クロアチアのセルビア人の地位

クロアチアのセルビア人は、なぜセルビアのミロシエビツチの路線を支持しクロアチア政府に対して武装蜂起したのか。この問題はクロアチアのセルビア人がこれまでどのような地位を得てきたのかということと密接に関係がある。私は次の二つの点が重要な要因ではないかと考える。

一つは、歴史的にみて、クロアチアのセルビア人はクロアチアの行政機関によって直接的に支配・管理された経験がほとんどなかったということである。したがって、クロアチアのセルビア人はクロアチア人が自分たちの統治者であると感じることはなかった。このことにはまず軍政国境地帯の伝統が大きく関係している。もう一つは、クロアチアのセルビア人が多数をしめるクロアチア人よりも優遇され、その人口比率以上に多い特権的地位を得てきたことである。

すでに述べたように軍政国境地帯は、クロアチアの中に

設置されたにもかかわらず、ザグレブのクロアチア議會ではなく、ウィーンのハプスブルグ帝国政府が直接的に管理する地域となった。その理由は、クロアチア貴族はトルコとの戦いにより疲弊して自力では国境を防衛できない状態にあったからであつた。一七世紀の後半以降、オーストリアはトルコを破り、トルコが占領していたハンガリーやクロアチアの領土を奪回し、軍政国境地帯を拡大した。この軍政国境地帯の警備兵はいわば屯田兵であり、平時には農民として耕作に従事するが、有事にはハプスブルグ皇帝直属の常備軍の一員として、オーストリアがおこなつた戦争に参加した。彼らはクロアチアの議會や政府に対して義務（たとえば納税義務）を負うことはなかつた。その後トルコの脅威はなくなり、軍政国境地帯はトルコに対する防衛線というよりも、ハプスブルグ帝国の兵力補給地という役割が大きくなつてゐた。

クロアチアにとっては、軍政国境地帯は治外法権に置かれた土地であり、クロアチア議會はウィーン政府に対してこの地域の管轄権を返還するように再三申し入れた。しかしオーストリアはたび重なる戦争のために兵力を必要としていたため、これになかなか応じなかつた。国境警備兵もまたその身分の変更には反対してゐた。軍政国境地帯が完全に廃止されるのは一八八一年であつた。しかし、その伝統はその後も生きのびて、かつての軍政国境地帯はハプス

ブルグ帝国軍の将校の多くを輩出した。一九一四年―一八年の第一次世界大戦中も、クロアチア民族感情が周囲で高揚する中で、かつての国境警備兵はハプスブルグ皇帝に対して忠誠を示してゐたといふ。

軍政国境地帯が廃止された一九八一年以降の期間も、この地域のセルビア人はクロアチア人によって支配されたわけではなかつた。クロアチアはハンガリーの統治下にあり、その自治権は大幅に制限されてゐたからである。とくに一八八三年から一九〇三年にはクロアチアの総督にはヘーデルバリーというマジャール人が就任し、ハンガリーの支配が強化された。一九一八年に誕生したユーゴスラビアはセルビアとセルビア人が支配する中央主権主義の国家であつた。クロアチアにも中央政府から多くのセルビア人の官憲（警察・徴税吏・将校）が派遣された。クライナ地方のセルビア人にはユーゴの解放者はセルビアであるといふセルビア主義の思想を吹き込まれ、彼らはセルビアの国王に忠誠を誓うようになった。クロアチアは、一九三九年のクロアチア自治州の創設によつて内政上の自治権を手に入れたが、このときにはクライナ地方のセルビア人は猛烈に反発し、彼らの居住地域を別の州に組み替へることを国王に要求した。彼らは歴史上初めてクロアチア人に直接的に支配されることになつたからである。

戦後のユーゴは連邦制の国家形態をとつた。クロアチア

は共和国の地位を得たが、その上には「ユーゴスラビア」という連邦国家の枠組みがあった。戦後のユーゴのイデオロギーは諸民族の友愛と団結であり、民族主義を演出することは固く禁じられていた。クロアチアは共和国となったが、それはクロアチア人の民族国家であることをけっして許されなかった。したがって、クライナ地方のセルビア人はクロアチアが共和国の地位を得ても、クロアチア人が支配する国家に属しているという感情をもつことはなかった。ユーゴの中ではセルビア人は最大多数の民族であり、クロアチアのセルビア人は少数民族だという感情をもつことはなかった。

またクロアチアの党幹部の中でセルビア人は人口比よりも多い比率をしめていた。ところが自由選挙の結果、クロアチア民主同盟が勝利し、クロアチア人が支配する非共産党政権が誕生することになった。セルビア人はクロアチア人が支配する国家に属することになったのである。これはクライナ地方のセルビア人、とくにその支配層にとつては承服できない事態であった。

第二に、クロアチアのセルビア人がクロアチア人よりも優遇されてきたという問題であるが、この問題は第一の要因と密接に関連している。そもそも軍政国境地帯の時代からクライナ地方のセルビア人はクロアチアの治外法権におかれ、クロアチアの政府に対する納税義務を免除されていた。

た。またハンガリーの支配が強化された一九世紀末の時代には、セルビア人はクロアチアを支配するために利用された。すなわちハンガリーはセルビア人を優遇して、クロアチア人に対する反対勢力にしたのであった。戦間期のユーゴはセルビア中心の国家であったから、クロアチアにおいてもセルビア人は様々な方面でクロアチア人よりも有利に扱われた。

しかし戦後のセルビア人の地位については、パルチザン戦争の経過の影響がもつとも大きい。周知のように第二次世界大戦中にユーゴは枢軸国によって分割占領された。クロアチアにはナチスの傀儡国家である「独立クロアチア国家」が形成された。このときユーゴには二つの抵抗勢力があった。一つは旧ユーゴ王国軍のセルビア人将校ミハイロビッチに率いられたチェトニクであり、セルビア民族主義の立場に立っていた。もう一つはユーゴ共産党（戦後共産主義者同盟と改称）のチトーに率いられたパルチザンである。クロアチアのセルビア人は、独立クロアチアの政権を担当していたウスタシャがセルビア人の虐殺をおこなったため、チェトニクの組織に参加した者が多かった。しかし共産党の巧みな組織化戦術によって、パルチザンに転身する者が増えた。パルチザンはユーゴの解放を目的に団結した多民族的な運動勢力であり、共産党はクロアチア人やスロベニア人が指導する組織であった。しかし、チェトニク

の脱走者を吸収して、終戦時にはパルチザンと共産党はセルビア人が多数をしめる勢力になった。

パルチザン戦争の参加者は、ユーゴの解放の功労者として、ユーゴの戦後体制の随所で特権的な地位に就いた。数の上で多数をしめたセルビア人は必然的に他の民族に比して特権的地位に就くことがより多かつた。とくにパルチザンの後身であるユーゴ人民軍の高級将校の中でセルビア人の比率は六〇%をしめ、この中にはクライナ地方の出身のセルビア人も多く含まれていた。

これに加えて、クロアチアではセルビア人はウスタシャの被害者として「戦後補償」を受けることになった。たとえば一九七一年のデータであるが、クロアチアのセルビア人は人口の一四%をしめていた。しかしクロアチアにおいてセルビア人は党と関連組織の幹部の中では二一%、立法政府機関の職員の中では二二%の比率をしめていた。セルビア人の比率が高いクライナ地方は後進地域であり、社会主義ユーゴの時代には政府から多額の補助金を得ていた。ところが自由選挙の結果、共産主義者同盟が政権を失った。共産主義者同盟という後ろ盾がなくなり、クロアチアのセルビア人、とくに支配層の多くはこれまで手にしてきた既得権を失うのではないかと不安をもつようになった。とくにユーゴ人民軍の退役将校は新政権に強く反発した。このため、彼らはセルビア民族主義を鮮明に打ち出したミ

ロシエビツチの路線を支持し、クロアチア政府に対して国旗を翻したのであった。

## 六 むすび

ところで旧ユーゴの民族紛争については次のような説明がしばしばおこなわれる。すなわち、旧ユーゴの諸民族の間には民族の憎悪や怨念が過去の歴史に蓄積されていて、これが民族紛争の背景になっているという説明である。たしかに社会主義ユーゴスラビアが成立する以前、セルビア人とクロアチア人の間には激しい民族対立があった。戦間期にはセルビアとセルビア人がユーゴを支配してクロアチア人を抑圧した。第二次世界大戦中にはセルビア人とクロアチア人とは相互に殺戮行為をおこなった。とくにクロアチアの極右組織ウスタシャはナチスをまねて強制収容所を造り、多くのセルビア人を虐殺した。セルビア人は報復行為としてクロアチア人殺しをおこなった。このたびの紛争の経過の中でこのような過去の記憶がマスメディアによって強調され、人々の不安をかき立てたことは事実である。だが「過去の記憶」は民族対立を促進した一つの要因ではあっても、そもそも民族対立を引き起こした要因だとは考えられない。

繰り返すように、武装蜂起したセルビア人は一部の

地域のセルビア人であり、そこに居住するセルビア人はクロアチアのセルビア人全体の三分の一に満たない。また紛争地域にはセルビア本国から民族主義者が多数派遣されており、実際に武装蜂起に加わったセルビア人のすべてがクロアチア出身のセルビア人であるわけではない。しかし、たとえ一部にせよクロアチアのセルビア人にとって、一九九〇年の自由選挙の結果とクロアチア人国家の成立はどうしても承服できないものであった。その理由は、一つにはクロアチア人によるセルビア人支配は我慢ならないという感情であるが、もう一つは既得権を失うことへの恐怖であり、これは実利的なものである。この意味で彼らの蜂起の原因は非合理的なものであると同時に合理的なものであった。

## 註

- (1) Miladen Lazic (urednik), *Položaj Naroda i Međunarodni Odnosi u Hrvatskoj*, Institut za društvena istraživanja Sveučilišta u Zagrebu, Zagreb, 1991, ss. 260-263.
- (2) 本稿は次の小稿を補足するために書かれた。材木和雄「東欧の体制変動と民族問題——ユーゴ紛争の根本要因」、北

原淳・大野道邦編著『社会学 理論・比較・文化』、晃洋書房、一九九四年所収。

- (3) ステイーン・クリソルド編(田中・柴・高田訳)『ユーゴスラヴィア史』、恒文社、一九八〇年、三七頁。
- (4) 同書、四二頁。
- (5) Leonard J. Cohen, *The Socialist Pyramid Elites and Power in Yugoslavia*, Tri-Service Press, London, 1989, p.303.